ヤナセ天然スギの今後の取り扱いに関する検討委員会（第 3 回）議事概要

今は、天然スギを資源としか見ていないが、生態学的に見て自然林を維持していけるのか心配。生物多様性の観点からすれば、大径木がなくなれば、拠り所のなくなる植生もある。また、更新の観点から、被害木を除去することがどのような影響を及ぼすのか、その辺も含め検討が必要ではないか。世の中の流れからしても、持続可能な林業を続けていくうえで、きちっと天然林の保護をしていますよと言えることが、今後の人工林高齢級材のブランド化にもつながるのではないか。

原案に賛成する。ヤナセ天然スギは、平成 24 年度で伐採・供給を終了した天然秋田杉と比べ、林地面積、蓄積量ともに半分以下となっており、資源を保護していくためには 30 年度からの休止はやむを得ないと考える。また、29 年度までの供給についても、十分に検討した上で実行していくことを要請する。

それぞれの立場で意見の違いがあると思うが、今回の事務局案は、これまでの検討会の議論を踏まえ各委員の意見を汲み取った内容として整理されていると考える。

ヤナセ天然スギが原木、あるいは製品として市場に出れば買い方の意欲が高い。継続は力なり、量的に減らすとしても、伐出技術、製材技術、利用する側のことも考えて、供給する体制は続けてもらいたい。30 年以降もゼロであってほしくない。また、人工林材については、単なる高齢級の大径材ではなく、ヤナセスギ優良材として評価を高めて欲しい。

意見募集の結果を見ると、継続的な伐採（供給）を求める声が多いのも事実。このため、被害木や危険木等の有効活用、人工林スギの大径木の供給など取扱い方針の内容を関係業界に説明し、理解を得ていくようお願いする。

大きな木は見て触るだけでパワーをもらえる。経済的なことも大事だが、後世にこのような資源は引き継いでもらいたい。森林セラピー的な利用ができるような方向に持って行っていただきたい。

千本山は古くから人の手が加わった林で、限りなく人工林に近い天然林であり、人工林か天然林かの位置づけが非常にあいまい。本来の天然林であれば、モミやツガが入っているはずだが、文献では、かつてはモミやツガを優先的に伐採していたとの話もある。ヤナセスギの保全に向けて、今後も調査を継続し、成果については報告したい。